

さいたま市立浦和博物館館報

あかんさす

VOL. 51

通号 第 120 号

「あかんさす」とは、浦和博物館2階バルコニー柱頭に見られる植物の葉の彫刻で、当館を象徴するキーワードの一つとなっているものです。

1 浦和博物館テーマ展「さいたまの人々と鉄道」について

浦和博物館は、令和3年7月1日のリニューアルオープンにより生み出した1階展示室内中央部の広いスペースを活用し、多くのイベントや講演会を実施できるようになりました。令和4年(2022)は明治5年(1872)に日本の鉄道が開通してから150年という節目となる年であり、5月1日から12月11日まで「鉄道」にフォーカスした「さいたまの人々と鉄道」をテーマに様々なイベントや講座、展示などを実施しました。

さいたま市民の日である5月1日には、さいたま市のテレビ広報番組「のびのびシティさいたま市」でレポーターを務める歌手のyuka氏による「愉快爽快のびのびシティライブ in 浦和博物館」、11月23日には、ギター奏者の大橋治生氏とオカリナ奏者の桑野めぐみ氏による「オカリナとギターで奏でる鉄道の歌」という音楽イベントを開催しました。これまで博物館を訪れたことのなかった市民の皆様は浦和博物館を知ってもらえる機会となりました。

また関連講座として、春季は5月4・5日に浦和博物館と小田急電鉄ロマンスカーミュージアム(神奈川県海老名市)のコラボ企画として「鉄道教室」を、5月29日に淑徳大学人文学部兼任講師の野尻靖氏を講師に「さいたまから大山へ」を開催し多くの方々が参加しました。6月24日から26日の3日間は、関連講演会「さいたまと鉄道」を開催し、地域の郷土史研究会及び埼玉高速鉄道株式会社から9人の講師による講演を実施しました。また6月14日から8月31日まで模型資料等を埼玉高速鉄道株式会社から借用し、浦和博物館において展示も実施しました。

秋季から冬季にかけては、10月30日に浦和郷土文化会の青木義脩会長、11月3日に大宮郷土史研究会の織本重道会長、12月3日に岩槻地方史研究会の飯山實会長による「鉄道」に関する講座を、12月4日には鉄道博物館からの講師による講座「鉄道の夜明け」を開催しました。これらの講座、講演会は大変多くの方々から応募があり、改めて鉄道の人気と鉄道の持つ魅力を感じるものとなりました。また、小田急電鉄ロマンスカーミュージアムのコラボ企画「鉄道教室」が好評であったため、11月14日(埼玉県民の日)に、同じ内容の講座を当館の職員で実施しました。



テーマ展関連講演会の様子

また、新たな試みとして12月11日に浦和美園駅を会場に「鉄道教室と埼玉高速鉄道見学会」を、埼玉高速鉄道株式会社の協力のもと実施しました。現地での駅や車両の見学も、社員の方からの説明を直接聞く機会に恵まれ、参加した親子が楽しみながら熱心に学ぶ様子が見られました。

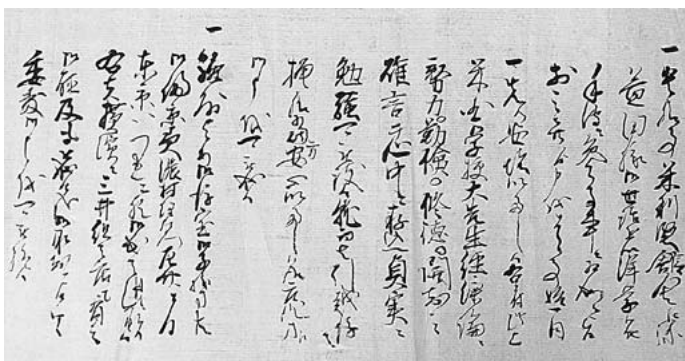


2 むかさゆうざ えもん ぎんすけ 武笠祐左衛門・銀介親子の隠された生涯（続）

武笠祐左衛門・銀介親子、その後の人生

前号の119号（令和4年3月発行）では、江戸幕府勘定奉行・小栗忠順の用人であった武笠祐左衛門（以降、祐左衛門とする）とその次男、後に三室村第13代村長となる武笠銀介（以降、銀介とする）について紹介しました。今号では、前号で紹介した武笠親子の明治維新後の動向について紹介します。

明治元年（1868）の小栗忠順の没後、銀介は、母の実家、土屋村永田家の土蔵にしばらく身を隠しました。祐左衛門も主君の死を知り、妻タカと共に駿河台小栗屋敷を退き、土屋村永田家に身を寄せました。祐左衛門は、主君をはじめ殉死した家臣団の位牌を作り道香院に供養しています⁽¹⁾。この頃の永田家当主は、銀介の母であるタカの兄、永田庄左衛門鷹習です。その長男が永田莊作で、やはり小栗家に短期出仕した経歴があり、後に埼玉県議会議長となっています。永田莊作の最初の妻は、祐左衛門の次女イツとされ、銀介から見ると、莊作は従兄でもあり義兄にもあたります。莊作の姉、銀介の義姉にあたる美喜は、日本橋の絵具染料問屋伊勢屋の主、平田喜十郎の妻となりました⁽²⁾。この平田喜十郎が函館港から横浜港へ入港した際、網走へ渡ろうとする銀介と面会したと永田家に送った書簡に記しています。「銀之助様にも御目ニ懸カレ其節垂走へ御引移り」、「函館開拓使 松浦判官様より宜敷」⁽³⁾とあります。松浦判官とは探検家で浮世絵も嗜んだ松浦武四郎のことで、明治2年（1869）から明治3年（1870）にかけて北海道開拓使判官を務めています。平田喜十郎については、松浦判官の趣味、浮世絵染料の調達という接点が推測できますが、銀介は極寒の地、網走で何をしようとしていたのか、書簡には年号が書かれておらず、はっきりとしたことは不明です。



資料1

一 貴様事米利堅館舎工弥
益田様御世話右洋学併
手傳ニ参る事ト相成候旨
おみ喜方申越候ハ、事始一同
一 先安堵いたし候右ニ付此上
米国学校大先生経済論ニ
努力〇勤儉〇修徳〇開知之
確言ヲ心中に存込貞実に
勉強可發候就テハ引越後之
模様当方安心いたし候様莊作方工
御申越可被成候
一 駿州ヨリ御後室御子様方共
御帰京美濃村理左衛門厄介ニテ
東京いつれニ哉御成ノ趣承り候
右ハ横濱ニ三井組ノ店モ有之
御聴及も被成候哉御承知ニ候ハ、
委敷御申越可被給候（後略）

読み下し

なお、永田家に身を寄せる祐左衛門から銀介に宛てられた書簡があります（資料1 個人蔵・私信「息子への戒めと茶葉の経済」）。「益田様のお世話によってアメリカ館舎に洋学並び手伝いに入ることになったと聞いて安心した。主君・小栗忠順の妻と娘が美濃村理左衛門の助けで静岡から帰京したと聞いたが、三井組のある横浜にいる銀介に詳細がわかれば教えてほしい」と書かれています。美濃村理左衛門は三井の大番頭になるまで奉公人として小栗家に入出入りし、小栗忠順には並々ならぬ恩義がありました。

では、銀介の横浜アメリカ館舎入りを助けた「益田様」とは誰でしょうか。後に三井物産を立ち上げる益田孝です。益田孝は嘉永元年（1848）の生まれ、銀介の5歳年上です。安政の頃、彼は十代前半で支配通弁御用出役（通訳官）を拝命し、麻布善徳寺のアメリカ公使館で米国公使タウゼント・ハリス等と接しながら、横浜のヘボン塾で英語を学んでいました。明治維新後は、横浜で茶や海苔の仲買商を営み、その優れた語学、交渉力を買われ、通称「アメイチ」と呼ばれるウォルシュ・ホール商会という米国の貿易会社に1年勤務していました⁽⁴⁾。この会社でロバート・W・アルウィンという店員と出会い親しくなります。明治6年（1873）、アルウィンが独立し企業した横浜居留地14番⁽⁵⁾、エドワード・フィッシャー商会こそが益田の世話によって銀介が務めたアメリカ館舎のことです。なお、益田孝は、元幕



府陸軍騎兵頭並に属し、陸軍奉行を兼ねた小栗忠順の支配下に組み入れられた経験がありました。ここでも小栗忠順の結ぶ運命的な縁を感じます。銀介自身が綴ったノートには、「式千五百三十四年一月十四日ヨリ海岸通十四番江入社」と記されており、明治7年(1874)、エドワード・フィッシャー商会へ入社しています。当時の横浜の外国人居留地は、戊辰戦争の際、各藩に武器を売りさばき基礎を築いた欧米の貿易商館が集中していました。国内の状況が落ち着くと、明治政府は外貨獲得の一環として、日本産の生糸や茶の輸出に力を入れ始めました。祐左衛門が身を寄せた永田家で茶作りの様子を伝えつつ、横浜にいた銀介に何度も横浜で製造されている輸出用の茶を取り寄せたいと数度依頼していることから窺い知ることができます。また銀介が、月給拾五円でエドワード・フィッシャー商会に在籍しながら先収会社にも雇われたということもわかっています。

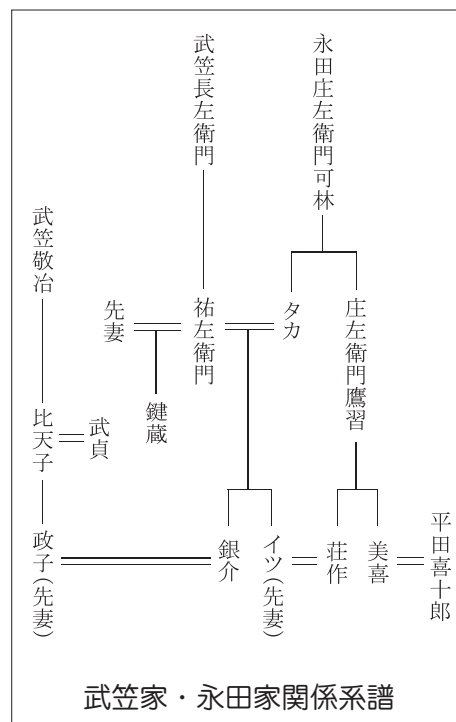
先収会社とは、大蔵省を辞職した井上馨と益田孝が明治7年に立ち上げた商社であり、三井物産の前身です。起業に際しては銀介の義兄、平田喜十郎も出資し同社に所属していました。益田孝は、エドワード・フィッシャー商会やアルウィンと交友を保ちつつ、例えば、開拓使からエドワード・フィッシャー商会が請け負った帆前船の買入を先収会社へ依頼するなど、互いに業務提携を行っていました(6)。『日誌』から銀介がアルウィンからの命で洋銀を買い集めたこと、輸入商で一財を成し現在も後進会社が存続する砂糖問屋の増田屋との取引をした記録などを確認することができます(資料2 埼玉県立文書館収蔵武笠(寛)家文書 No.1406 (日誌))。これは銀介が有能な会計役として重要な役割を果たしたことを示すものです。



資料2 埼玉県立文書館収蔵
武笠(寛)家文書 No.1406 (日誌)

増田屋取立帳三十三帳動定書
一黒砂糖三千俵此斤式十九万五千五百六十五斤百斤十斤
求價壹万五千五百十六兩八十匁錢
右求價利足併非常受合共日数十八日分
洋五十九兩四匁共銀百兩洋三枚三十錢
千六百五十兩三千匁之内
右海波止場ヨリ商社庫迄引取人足領替り
洋貳拾拾枚
總計壹万五千九百九十七兩貳拾貳錢
是所 受取高洋壹万八千八百三十八兩
右之通也
明治七年七月廿三日 エドワルドフ氏商社
増田屋取

読み下し



ところが順風満帆な銀助の貿易商としての活躍も突然の転機が訪れます。明治10年(1877)6月5日に父・祐左衛門が土屋村永田家で没しました。晩年は足を不自由にし、永田家長屋門に現在も残されている籠で出かけていたと伝わっています。永田荘作が仮親となり、翌明治11年(1878)、銀介は偶然にも、三室村の同姓の武笠家に入籍しました。養父となった第12代当主・武笠武貞は大間木村大熊家から婿入りしており、娘3人のうちの2人の娘を亡くし、長男・貞之助も明治5年(1872)に他界していました。銀介はその武笠武貞の一人娘、武笠政子に婿入りすることとなったのです。『日誌』の「養子相続艱難ようしそうぞくかんなん記」では婿入り当初から、義父との関係で悩む困惑ぶりが綴られています。『日誌』は、最後の明治11年10月17日、埼玉県第六課簿記生の募集があり、試験を受けることになったところで終了しています。銀助の履歴書から見るに試験には無事合格したようで、明治11年11月23日に簿記伝習生になっています。その後、監獄署内の簿記伝習生、會計掛、農産組合長など役職を歴任、明治42年(1909)4月14日に三室村長となり、大正10年(1921)1月1日、在職中に生涯を終えました。村政のため私財を投じ尽力した銀介の葬儀には多くの人々が参列しました。小栗忠順に影響され、明治維新後も身の回りの人々



を助けようと村政に奔走した銀介の姿の目に浮かびます。江戸幕府勘定奉行・小栗忠順のこしょう小姓として銀介が過ごした日々は掛け替えのない経験となったはずです。銀介は酒の酔いが回ると、横浜で培った流暢な英語で機嫌よく会話をしたが、小栗忠順の事は口を堅く閉ざしたと伝わっています。銀介は現在、緑区三室の白衣観音の隣、武笠家墓地に眠っています。

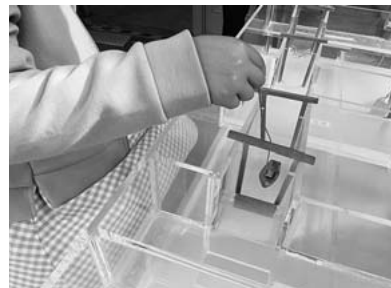
(文化財保護課 学芸員・磨田顕寛)

【脚注】

- 1 河野正男「小栗上野介をめぐる秘話」(2003 群馬出版センター)
- 2 この夫妻の間に生まれた子が英文翻訳家・平田禿木である。幼少期病弱であったため、土屋村永田家で生活しており、銀介とも度々書簡を交換し合っている。
- 3 『大宮市史 別巻二 永田荘作関係書簡集』340P
- 4 長井実「自序益田孝翁伝」(1998 中央公論社)
- 5 横浜外国人居留地には国籍別商館番号があり、地番に代用された。エドワード・フィッシャー商会は横浜居留地14番である。
- 6 安岡重明・木山実「益田孝「備忘録」(写本)」『三井文庫論叢標 第30号』(1996 財団法人三井文庫) 274P

日誌抄

- 5月1日 テーマ展関連イベント「愉快爽快のびのびシティライブ in 浦和博物館」
- 5月1日～5月31日 ミニ展示「ロマンスカーと大山詣」
- 5月4日・5日 「浦和博物館・ロマンスカーミュージアムコラボ企画 鉄道教室」
- 5月29日 テーマ展関連講座「さいたまから大山へ」
- 6月7日 さとえ学園小学校(4年生)体験学習
- 6月24日～6月26日 テーマ展関連講演会「さいたまと鉄道」
- 7月12日～13日 中学生職場体験(木崎中)
- 7月22日～7月31日 博物館学芸員実習
- 7月26日・27日・30日・31日 夏休み子ども博物館講座「まが玉づくり」
- 10月18日～12月11日 テーマ展「さいたまの人々と鉄道」展示
- 10月30日 テーマ展関連講座「南浦和駅の開設とその後」
- 11月3日 テーマ展関連講座「大宮と鉄道」
- 11月5日・6日・12日・13日 「見沼通船堀のしくみ実験」及び「農具・民具から学ぶ昔の知恵」
- 11月10日 春日部市立武里西小学校(4年生)体験学習
- 11月11日 春日部市立桜川小学校(4年生)体験学習
- 11月14日 埼玉県民の日企画「鉄道を知ろう! 鉄道ペーパークラフト教室」
- 11月18日 河合小学校(3年生)体験学習
- 11月23日 テーマ展関連イベント「オカリナとギターで奏でる鉄道の歌」
- 11月27日 親子探鳥会
- 12月3日 テーマ展関連講座「武州鉄道」
- 12月4日 テーマ展関連講座「鉄道の夜明け」
- 12月11日 テーマ展関連イベント「鉄道教室と埼玉高速鉄道見学会」
- 12月22日～2月28日 ちょっと昔のくらし展
- 1月20日 芝原小学校(3年生)体験学習
- 2月8日～9日 中学生職場体験(埼玉大学教育学部附属中)
- 2月28日 三室小学校(3年生)体験学習
- 3月14日 浦和ルーテル学院小学校(3年生)体験学習
- 7月23日・24日、8月20日・21日、9月23日・24日、10月9日・10日、12月17日・18日、1月8日・9日、2月11日・12日、3月19日・21日 うらはく工芸くらぶ



「見沼通船堀のしくみ実験」及び「農具・民具から学ぶ昔の知恵」



親子探鳥会

さいたま市立浦和博物館館報 **あかんさず** No.120

編集・発行 さいたま市立浦和博物館
〒336-0911 さいたま市緑区三室2458 TEL・FAX 048-874-3960
発行日 令和5年3月17日
ホームページ <https://www.city.saitama.jp/004/005/004/005/002/index.html>
E-mail urawa-museum@city.saitama.lg.jp



この館報は1,500部作成し、一部当たりの印刷経費は33円です。

